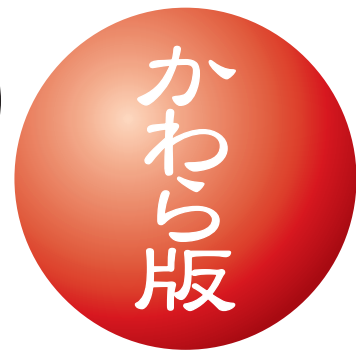


NIPPON



48号



日本製紙

発行所 東京都千代田区一ツ橋一丁目2番2号 〒100-0003 日本製紙株式会社新聞営業本部 電話 03-6665-1030 FAX 03-3217-3161 www.np-g.com/ newsprint@np-g.com ©日本製紙株式会社2010



ガキ大将が感動で涙が出そうになった「新聞」との出会い

記録的な猛暑も一段落し、皆様におかれましてもほっと一息つかれておられることでしょうか。私共も6月の組織改正や人事異動以降数ヶ月がたち落ち着き始めたところです。

入社以来、主に管理・総務関係の仕事(かわら版45号参照)を歩んできました私も新聞営業本部に異動後早や1年が過ぎ、新芽が少し顔を出した程度にはなった(笑)のではないかと感じております。

時間が許す限り全国の新聞社様をご訪問するようにしておりますが、まだまだお会い出来ない方も多く、今回は紙面をお借りして「紙」「新聞」のエピソードを交え自己紹介をさせていただきます。

新聞営業本部長代理兼新聞営業部長 中川利之

「紙」との出会い

1957年、生まれは東京ですが物心もつかないうちに千葉市の幕張に引越しました。私の住んでいた頃の幕張は、誰が今日の幕張を想像出来たかというくらいの田舎町。当時の幕張は現在のメッセを始めとする高層ビル街はすべて海。気の荒い大人が多く居る典型的な漁師町でした。

とにかく負けず嫌いのガキ大将で、小学校入学式の翌日に同じクラスの見知ら

ぬガキ大将と大喧嘩になりました。この日は、初めてもらう真新しい教科書が配られ机の上に置いてあり、その互いの教科書をすべてビリビリに破いてしまいました。

先生が血相を変え教室に飛び込んで来るなり左の頬に強烈なピンタを張られました。生まれて初めて味わった大人の大きな平手の痛さ。首が右に曲がったままになった次の瞬間「直してやる」と右の頬に平手が飛んで来ました。本当に痛

かった。目からは大粒の涙が止まらなかった。でも、歯を食いしばって泣き声だけは出さなかった。あの時のことは今でもはっきりと覚えています。今でも紙を破ると、あの情景を懐かしく思い出します(笑)。

「新聞」との出会い

中学、高校時代はガキ大将の面影を残しながらも野球部に属し練習に明け暮れていました。

中学2年になる頃であるうか、何気なくバラバラと

新聞をめくっていた時、いわゆる「読者投稿ページ」で手が止まりある投稿文を読みました。当時の私と同世代の文だった。「同世代でこんな…」感動し涙が出そうになりそれからは毎日このページだけは欠かさず読み、心に残る文章はいくつもありました。

時間がたち読み返したくなったり忘れてしまったりで、しばらくしてから切り抜いてスクラップブックにすることを覚えました。気恥ずかしさもありません

取袋に入れた後、数日後に引っぱり出しては切り抜いて、何回も何回も読み返していたのを記憶しています。でも、これが人にあてがわれた物を読むのではなく自分で探したものを読むということの原点になったのではないかと思います。

先日、新聞協会の企画で野口英世の母が書いた手紙が掲載されていましたが、心から込み上げてくる感動で言葉では言い表せない気持ちになりました。

(2ページに続く)



ART 製紙工場百景

photographer 新聞営業部 富井美夏

10ページ



校旗を持って行進する中川

「十條製紙」との出会い

1980年秋、十條製紙(当時)の入社試験を受けました。最終の役員面接。数名の役員が面接官でいました。その中央に眼光鋭く一目で1番偉いんだと分かる方が座っており(石上副社長(当時)、後の社長)質問の大半をされました。

「今日だけで10数人の学生を面接して疲れたよ。君が最後だ。それにしても大きな声だね。そんなに大きな声でなくても十分に聞こえるよ。いつもそんな大きな声なの」「気にしたことはありませんでしたが、静かだねと言われたことは無いです」(一同笑)。「ところで、お酒は好きかい」「はい、

大好きです」「ほう、何が好きなんだい」「タダ酒が一番好きです」(一同大笑)。私は、眼光鋭い石上副社長のまったく別人のような柔和な笑顔とのギャップがおかしくて一緒になって大きな声で笑ってしまいました。

後日、配属先の発表がありました。「今年の新入社員は全員本社に配属します」(私には確かにそう聞こえた)。「中川さん、釧路工場」「??」他の人は経理部だ資材部だ新聞営業部だと明確に分かる。「釧路工場」って何の部署?「釧路工場という部署は何をするのですか」「あっ、中川さんには北海道の釧路工場に赴任してもらいます…ただし、1年間だけですから」。

そのようなことで社会人のスタートを釧路工場から切りました。1年後の本社への異動は上司にお願いし断ってもらいました。この時の4年半の釧路生活で現在の体型の礎が作られました。製紙工場を「臭い」と言われる方も多いのですが、私は今でも、木材チップを擦りつぶしたり、煮たりする時の「香り」が大好きです。

その後の経歴につきましては、機会がございましたら紙面や、直接お会いさせて頂いた時にでもお話ししたいと思います。これからも「新聞用紙」という新聞社様にとっての基礎資材の長期安定納入への責任と自覚を持ち業務に邁進したく考えております。よろしくお願ひ致します。



column「北の丸だより」 「小学生は新聞を読んでいます!!」 ・・・親バカより

とかく悲観論が先行し閉塞感の強い昨今、この場をお借りして身近にあった少し明るい話題を紹介させて頂く。小学生の娘を持つ親バカからの一言二言、どうかお許し願いたい。

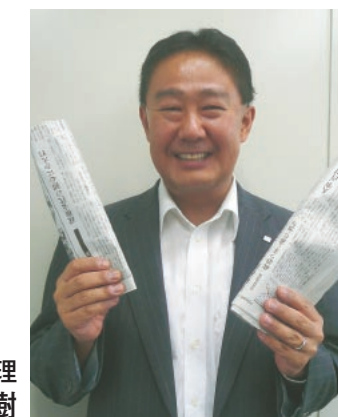
今夏、単身赴任中は家族に苦勞や不自由をかけたであろう!との思い込みから、妻や子供と過ごす時間を最優先に長い休みを取ることを決めた。海や山への家族旅行、子供の通う小学校での行事に積極的に参加した。その1つに新聞や雑誌の記事を活用し子供達と意見を述べ合う夏休みの自主教室があった。実際は普段あまり接する時間の少ない親子が身近な話題について意見を述べ合い、閉会後は親の親睦というよくある会であった。

そんな会ではあったが、小学生は我々が考えている以上に新聞や雑誌を読んでいる。時事の話題について意見を述べあったり、分からないことは専門の本やネットで調べたりと、親の知らない世界で活字媒体を起点に様々な展開を行っている。どうも新聞や雑誌、TV、電子媒体の使い分けも上手に行っているようだ。断片的な知識ではあろうが物知り小僧がたくさんいる、驚くばかりであった。将来への期待を込め、親バカは子供達を頼もしい限りと思ってしまう。

さらに子供達に突っ込んで聞いてみると、家庭で新聞は毎朝複数紙を駅に買いに行く、昔から店で使うスポーツ紙のみ、昔からある紙を定期

購読、必要な時にだけ買いに行く、予想はしていたが家庭における新聞購読のスタンスは多様化していた。改めて新聞社販売の皆様のご苦勞を痛感した。

新聞は無くなっては困るものの1つ!と大多数の子供達が声を大にしていたことが、1番記憶に残っている。決してこちらが誘導した訳では無い子供達の声である。ある新聞社にお勤めの親からも親睦の席上で驚きを隠せないコメントが出ていた。私としては将来に明るい見通しが少ない話ばかりが聞こえる紙媒体、身近な小学生の間でこんなに親しまれていることが驚きと共にうれしさでもあった。あれ以来、小学生の間では新聞オジサンと呼ばれ夏祭りなどの地域行事でも人気は上々であるが、一方で秋風と共に娘からは距離をおかれ始めたような気がしてならない。



新聞営業本部長代理 白井直樹

一橋一丁 いっきょういっちょう

今夏といえば猛暑。今号の「一橋一丁」は北海道からだが、地域的に自分達が暑い以上に、一次産業への影響が気になる場所である。◆今年とは逆の冷夏、輸入米で一騒動だった93年、筆者が米の不作が深刻になりそうだと知ったのは、記者の報道ではなく、新聞の読者投稿欄を読んでのことだった。先行したマスコミ情報はあったと思うが、職業「農業」と書かれた署名投稿には、記者の報道とはまた違う心に残る力があつた。◆インターネットでは個人が自由に意見を発信し、直接関与する本職の意見から、各方面への配慮が必要ない自由さが魅力の素人の意見まで知ることが出来る。◆素材は豊富だし、記者の報道が踏み込めない領域があるのも確かだ。しかし、限界があるからこそ、拾い得る情報があるのも確か。どうか確かな情報を拾い出して読者に提供して欲しい。筆者は秋の果物の心に残る情報を求めてやまない。(K)



『Mr. NORPAC』 バック・ジョンソン氏 回想録

長くNORPAC事業を支えたバック・ジョンソン氏が、40年のキャリアに終止符を打ちウエアールハウザーを退社することとなりました。ノーバックという日米最大の合弁新聞用紙工場の準備、建設、立ち上げ、製品輸出、品質管理、販売などすべての局面で活躍された『Mr. NORPAC』ジョンソン氏と40年間を振り返ります。



1965年の夏、ワシントン州タコマの高校を出てすぐに、ウエアールハウザーのロングビュー工場アルバイトを始めたのがウエアールハウザーとのきっかけだった。ジョンソン氏はワシントン州立大学で財務と国際ビジネスの修士号を取得、「為替のディーラーになり何億ドルもの大金をボーダーレスで動かす」という夢を抱いていた。大学院2年目の時に、正社員のオファーを受けるも銀行員の夢捨てきれず一度は断わる。それでも熱心に誘われ、最終的には「会社のために卒論を書いてくれないか？」と依頼され、在学中の1970年6月にウエアールハウザー社の正社員となった。

1970年の秋、三井物産からウエアールハウザー社に「日本の会社と新聞で合弁事業をやるか？」との

提案を受け、NORPAC事業の第一歩がスタートした。1971年の春に、十條製紙から最初の調査団が来米する際にジョンソン氏も受け入れチームに加わり、その年の6月に日本支社への出向命令を受ける。第1回目の日本駐在では市場調査を中心とする業務を担当し、NORPACの立ち上げ準備として幾度となく石巻工場や銅路工場に足を運んだ。調査内容はJohnson Reportとして1冊の本となりフェデラルウェイの本社幹部に上程されることとなる。

駐在生活も終盤に差し掛かった頃、「日本の会社を中から学びたい、新聞でウエアールハウザー社」と思い、「十條製紙の営業に入れて欲しい」と当時のボスであるチャック・カーペンター氏(後のNORPAC社長)に掛け合う。当時の森田

部長(後に専務取締役)が快諾し、1978年9月から翌年3月まで十條製紙の新聞用紙部に机を並べることとなる。森田部長の「ジョンソンさんに対して秘密は何もない、営業部の一員として接するように！」という言葉で、内部資料もすべて公開された。部員と同じ扱いで社内旅行や懇親会にも参加し、公私の区別なく寝食を共にするという日本式のやり方に感銘したという。「営業部全員が、私を部の一員として大変快く迎えてくれ、森田さんのご好意を強く感じる事が出来た。これが十條製紙との恋の始まりだった。」とジョンソン氏は満面の笑みを浮かべる。

1979年4月に製品課長としてNORPACへ赴任する。同年7月19日の1号機の立ち上げ時は、工場全体

が本当に死に物狂い。「朝7時から夜12時まで毎日17時間勤務。それを数ヶ月続けた。芯棒は揃っているか、包装は出来るか、製品倉庫は大丈夫か、従業員の多くが素人だったため、本当に大変だった。」と当時を振り返る。その後、技術サービス部長代理となり、NORPACの紙を日本に持ち込む役割を担った。技術サービスといっても、技術の技もサービスのサも分からない。とにかく部長のボブ・レイの下で必死に働いた。NORPACの印面は抜群に良いものの、なかなか作業性が良くならない状況がしばらく続いた。

特に80年代中盤の紙流れ問題には苦労し、その他の品質トラブルにも見舞われ朝刊立会の連続だった。立ち会いの合間に、印刷所の入り口の階段に座り、夜空を見上げながら「俺は銀行マンになるはずだったのに、一体こんなところで何をしているんだ！」とつぶやいたそうである。日本とアメリカの考え方の違い、特に日本の細やかさを理解させるには大変な労力を要した。「なぜ100本に1回の断紙がダメで、1000本に1回でなければならぬのか?これをNORPAC

の工場の人に理解させることは簡単ではない。」米国人にとっては、日本の新聞社の要求はあまりにも厳しく、コストに見合わない。顧客や十條製紙の要望を実現しようと頑張るほど、ウエアールハウザー社やNORPACからはどちらの味方なのかとげげな目で見られることもあった。逆に、ジョンソン氏の苦闘振りを知る十條製紙からは高い評価を受けた。

昭和から平成に切り替わる頃は、北米や北欧の新聞用紙メーカーが日本市場参入を狙って人材のヘッドハンティングを行っていた。ジョンソン氏もその例外ではなく、NORPACよりも大きい新聞用紙メーカーから破格の好待遇で迎えられる話があった。米国では個人がキャリアを重ねながら転職していくことはごく普通に有ることである。なかでも北米随一のメーカーからの熱心な誘いは、カナダモンリオール島の西にあるヨットクラブでサインする寸前まで話が進んだ。待遇が申し分ない上に、モンリオールのような国際都市であれば、子供を育てる上でもロングビューよりはるかに良いことは明白だっ



Interview

40年を振り返っていかがですか?

40年のうち39年間は新聞に携わってきました。この39年は汗と涙と血の結晶。もちろん楽しいこともたくさんありましたが、思いつくのはつらいことばかり。もう1回やり直すかと問われたら、同じ道は選択出来ない。それくらい個人的な犠牲は大きいものでした。40年間ノーバックのゴールデンピリオドに携わることが出来たのは大変光栄です。しかし、今は何も未練ありません。きっぱりと卒業したいと思えます。これからのNORPACは、ぜひ次の世代の人につ

くって行ってもらいたいです。新聞社の皆様に対するメッセージ
39年間、個人バック・ジョンソン、そしてNORPACの製品をご愛顧頂き、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。新聞社の皆様には、日本の新聞用紙産業がいかに優れているかということを知って頂ければと思います。どのくらい世界の技術をリードしているか、どのくらいきめ細かいサービスをしているか、営業でも技術サービスでも工場の製造現場でも、他の国と比べてどのくらい先を走っているかを分かって欲しいと思

います。日本製紙に対してもメッセージをお願いします
心よりお礼を申し上げます。変な外人人としてではなく、心の通った人間として、受け入れてくれたことを感謝したいです。日本製紙はチームプレイが優れており、グループで仕事をする事の素晴らしさを日本製紙から学びました。そのグループの一員として受け入れてくれたことに、誇りを感じています。日本製紙が紙パの世界トップ5に入るといのは私の夢でもあるので、実現に向けてぜひ頑張ってくださいと思



ゆかりの深い方からのコメント



中日新聞社用紙顧問
莊加 正樹

「水が半分程入っているコップがある。これを『半分しかない入っていない』とみるか『半分も入っていない』とみるかの違いが日米間の品質問題の捉え方の違いだ。」これがある時の当社とノーバックの技術陣との懇談会後のミーティングでのバックさんの指摘でした。水の目盛りを断紙率に置き換えれば良く理解出来る。

1979年のノーバック・ロングビュー工場創業以来、工場の技術陣と日本の新聞社の製作現場との仲介役として、ベースの上がらない品質改善のスピードにイラ立ちを禁じ得なかったのでは?と推測される。

若い頃に単身で渡米、苦労を重ねつつ米国での市民権を得る。ノーバック創業以来、日本の新聞社における使用状況を正確に工場担当者に伝える役割を担って35年間「文化」の相克に悩みつづ、ほぼ10年間で日本の巻取紙の品質レベルに上昇させることが出来たのは、バックさんの尽力によるところ「大」とすべきであろう。

退社後もハワイと米本土をほぼ半分ずつ、との生活を実現すべくご尽力中とかがっている。これからも一市民として現実の生活レベルで日米間の文化の差を解消すべく、余後の時間の費消されんことを切望したい。



日本製紙グループ本社特別顧問
小林 正夫

去る7月にバックさんを囲んで、ノーバック社で縁のあった4人で会食をした。そこで、バックさんはウエアールハウザー社退職に際してもらった40年勤続を賞する立派な社章をかざして見せてくれたが、その時の誇らしげな笑顔が忘れられない。人懐こい40年前と少しも変わらない童顔の笑顔。それにしても40年間ひたすらノーバック社のために働いてきた人は他にはもう誰もいない。ウエアールハウザー社でも、ノーバック社でも十條製紙(現日本製紙)でも顧客の方々でも、社長や幹部は何代も替わったのにバックさんだけが頑張ってきた。これは実に稀有なことではないか。

バックさんは1976年設立以来今まで良好な

関係が続いているこの日米の合弁会社の文字通りの縁の下の力持ちだった。その力の源泉はなんだったのか。私は日米の当事者誰に対しても臆することなく適切かつ正確にそれぞれの意を伝えることが出来るコミュニケーターとしての能力だったと思う。特に、マシンや原料現場の人達に彼等が日常使っている言葉で、日本の需要家の厳格な品質要求を伝え、納得させていった頃の働きは誰もまねることが出来ない。この辺の経緯を知るために、かつて読売の元大森常務がノーバック社の社内報(NORPAC NEWS 2006年1月号)に寄せた一文とバックさんの素晴らしい英語翻訳を今の当事者の皆が熟読することを特に薦めたい。